

ポーランドのワルシャワ大学における日本学研究

アグニェシカ・コズィラ

日本研究の概略

19世紀中頃、日本の文化はフランスをはじめヨーロッパ中で注目をあびていた。ポーランドも例外ではなく、知識人は日本へ目を向けるようになり、その結果、日本をテーマとした小説や物語が相次いで出版されるようになった。その中でも、日本に関する著書を多数執筆したのは、シエロシェフスキ・ヴァツワフ (Sieroszewski Waclaw) 氏である。さらに日本文化の影響は、ジェロムスキ・ステファン (Żeromski Stefan) 氏や、レイモント・ヴワディスワフ (Reymont Władysław) 氏という二人のノーベル文学賞受賞者の作品にも見られる。

1902年、ピウスツキ・ブロニスワフ (Piłsudski Bronisław) 氏が日本を訪問し、北海道などでアイヌの習慣や伝統を研究した。氏はアイヌ民謡などの録音をはじめ、貴重な資料を収集した民族学者として、日本でも知られている。

1816年に創設されたワルシャワ大学では、1919年7月、リヒテル・ボグダン (Richter Bogdan) 氏が少数のポーランド人の学生を対象に日本語を教え始めた。それはポーランドにおける初の日本語講座であり、学生が選択できる科目を増やそうという改革への努力の成果でもあった。リヒテル氏は、戦間期に有力なアジア研究センターであったルヴフ大学で、教授資格取得論文審査に合格し、1924年、助教授に昇格した。1925年にワルシャワ大学に移り、1932年まで日本語教育と極東文化の研究を続けた。同氏は日本文化に関する著書を数多く出版し、中でもポーランド語に翻訳された最初の日本文学断章や日本文学史概論などはとりわけ注目され、ポーランドにおける日本の知識普及のために大いに貢献した。リヒテル氏のもとで最初に日本研究課程を卒業したのはゼイフリド・カミル (Seyfrid Kamil) 氏であった。氏は日本文学の翻訳者として知られ、また氏の尽力により、ポーランド人日本学者の書籍文献が収集された。リヒテル氏の来日後は、ヤボルスキ・ヤン (Jaworski Jan) 博士がワルシャワ大学における日本語教育を引き継いだ。ヤボルスキ氏は日本学者であると同時に、宗教学を専門とする中国学者でもあった。

その後、1933年にワルシャワ大学を訪れた三井高治男爵の財政援助により、ワルシャワ大学における日本学研究は著しい発展を遂げた。

ワルシャワ大学における戦後の日本研究の開拓者はコタンスキ・ヴィエスワフ (Kotański Wiesław, 1915-2005) 氏である。ワルシャワ大学出身のコタンスキ教授は、1930年から日本研究を続け、長期間日本学科の主任を務めた。同教授はワルシャワ東洋専門学校で日本語を習得した後、1945年に修士学位を、1951年に博士学位を取得した。1952年からは独立

した日本学専攻の修士課程を指導する許可を得た。コタンスキ教授の尽力により、1956年、日本学科は完全に独立し、ワルシャワ大学の他の学科と同等の権利を取得したのである。同教授は多数の著作や翻訳を含む200以上の学術論文や一般教養書を発表した。その研究業績の中では何よりも『古事記』(Kojiki, PIW, Warszawa 1981)のポーランド語訳が挙げられる。氏の『古事記』論はポーランドで注目をあび、古代日本語語源研究の主要な研究者として高く評価されている。また、ポーランド語で書かれた『日本の神々の遺産』(*Dziedzictwo japońskich bogów*, Ossolineum, Wrocław 1998)など、日本文明を分析し、解説した書物を多数執筆した。日本語のものでは「言霊と古事記に関する従来の語訳について」(『大阪国際大学紀要』8:3/1996)、「古事記における神名と人名に伴う俗名」(『大阪国際大学紀要』6:4,7:1/1994)、「古事記原文を研究する理由、方法、抱負」(『神道文化』8/1996)、「日本古代歌謡の解明」(『日本研究』17/1998)、「私の古事記研究をめぐって古事記の中身に上代文化が映じている」(『アジア研究所紀要』26/1999)、「新しい古事記研究。古事記ほど首尾一貫性のある宇宙進化論はない」(『祖国と青年』7/1999)や「原初に現れた神々の天命。古事記における言語学的考察」(『心霊研究』641:7/200)などが挙げられる。『万葉集』(*Antologia dziesięciu tysięcy liści*)と題された日本古典文学選集は、学生に愛読され、ポーランド語による日本の古典文学入門として重要な著書となっている。

1960年代以降に日本研究が著しい発展を遂げた理由は、日本との関係がより密接になったことにある。新任の日本人講師もポーランドで教鞭を執るようになり、米川和夫氏が1967年まで、工藤幸雄氏は1974年まで日本語講師として勤務した。両氏とも優れたポーランド文学の翻訳家として知られている。その後岡崎恒夫氏が仕事を引き継ぎ今日に至っている。岡崎氏はワルシャワ大学日本学科における日本語教育の発展を促進させた。吉上照三教授の尽力の結果として、ワルシャワ大学と東京大学との交流は盛んになった。

1970年代後半には東京大学と学術協定が結ばれ、また、国際交流基金の援助もあり、日本学科の卒業生たちは日本に留学できる機会を得た。東京大学及び他の国立大学の教授もポーランドへ招聘され、日本語教育に携わるようになった。

70年代、日本学科のカリキュラムは、文学、歴史学、言語学の三つの専攻に分けられた。歴史学はトウビエレヴィッチ・ヨランタ(Tubielewicz Jolanta, 1931-2003)教授(ワルシャワ大学東洋学研究所副所長、ワルシャワ大学新言語学部長も兼任)、文学は主としてメラノヴィッチ・ミコワイ(Melanowicz Mikolaj)教授(ワルシャワ大学日本学科主任、ワルシャワ大学東洋学研究所所長も兼任)が担当した。

トウビエレヴィッチ・ヨランタ教授は古代を中心に日本史を研究し、教授資格取得論文として『*Superstitious, Magic and Mantic Practice in the Heian Period*』を提出した。また、『日本の神話』(*Mitologia Japonii*, Wydawnictwa Artystyczne i Filmowe, Warszawa 1977)、『日本史』(*Historia Japonii*, Ossolineum, Wrocław, 1984)、『日本考古学の発見と謎』(*Wielkie odkrycia i zagadki japońskiej archeologii*, Trio, Warszawa 1996)、『日本文化事典』(*Kultura Japonii*,

Słownik, Wydawnictwo Szkolne i Pedagogiczne, Warszawa, 1996、『古代日本における男女関係』(*Mężczyźni i kobiety w starożytnej Japonii*, Nozomi, Warszawa 2000)などをポーランド語で発表した。

長きにわたり、ワルシャワ大学日本学科の主任を務めた岡崎クリスティナ (Okazaki Krystyna, 1942-2008) 氏は中江兆民研究について博士論文を提出し、『方丈記』などの日本文学のポーランド語訳を発表した。1997年に『日本芸術辞典』(共著、国際交流基金、東京)を出した。

1980年には、東海大学と国際交流基金の協力のもと、ワルシャワ大学日本学科において国際シンポジウム「日本の現代社会・文化の中の人間」が開催された。

1991年には日本学科が提唱し、吉上昭三教授や多くの個人賛同者の支援を得て、ポーランド日本学基金が発足した。翌1992年には共英製鋼株式会社の高島浩一社長からの寄付により、ワルシャワ大学日本学科内に高島基金が設立された。当時駐日ポーランド大使として日本との交流の発展に奔走したリプシツ・ヘンリク (Lipszyc Henryk、元日本学科講師) 氏も、基金の設立に尽力した。高島基金はワルシャワ大学日本学科の発展を支え、ポーランドでの日本文化普及に大いに貢献している。同基金の支援のもと、日本学科は日本文化を紹介する独自の研究誌『ヤポニカ』(*Japonica*)とシリーズ「日本文学図書館」の発行を開始した。

1994年11月、国際交流基金、在ポーランド日本大使館及びワルシャワ大学当局の協力を得て、日本学科はポーランドにおける日本語教育75周年を記念し、日本研究シンポジウムを開催した。参加者はヨーロッパ諸国の日本学研究者やワルシャワ大学の日本研究関係者で、かつて同大学で教鞭を執った日本人講師も多数参加した。

ワルシャワ大学の日本学科史上最も記念すべき出来事は、2002年7月の天皇皇后両陛下のご訪問である。同大学の学生や教員、関係者は両陛下の拝顔の栄に浴した。

2002年10月4日、長年にわたるポーランドでの日本研究と日本語教育の推進、またポ日両国の文化交流及び相互理解の促進への貢献をたたえ、国際交流基金よりワルシャワ大学日本学科に国際交流奨励賞が授けられた。

2004年にはワルシャワ大学でヨーロッパ日本学協会 (European Association for Japanese Studies, EAJS) の学術会議が開かれ、ヨーロッパ諸国をはじめ、日本、アメリカ、オーストラリアなどから650人の日本学研究者がポーランドを訪れた。当時ワルシャワ大学日本学科主任およびヤギェロン大学日本学科主任でもあったメラノヴィッチ・ミコワイ教授が、学会の組織委員会委員長を務めた。

学習プログラムと日本との交流

1980年代に新学習プログラムが導入され、日本学教育の水準は高まった。これは東京大学スラブ・ポーランド言語学者である吉上昭三教授の尽力の賜物である。吉上教授は戒厳令が布かれた困難な時代に、2年間もワルシャワ大学で日本語教育を行ったのである。

現在の新教育プログラムは3年間の学部課程と6年間の大学院課程（修士課程2年、博士課程4年）に分けられている。

学部課程は、日本語と日本文化の一般教養を十分に習得できるようになっており、最初の2年間は漢字、会話、文法といった日本語の科目や、日本の歴史、文学、宗教、芸術、現代文化の入門的講義を受講する。その後、学部課程の3年次に自ら選択したテーマに基づいて論文を書き、卒業時には学士号（BA）が与えられる。

修士課程は日本学科の学部課程を修了し、さらに専門の知識を深めようとする学生のために設立された。2年間の課程修了後には修士号（MA）が与えられる。古典文学、現代文学、歴史学、宗教学、思想、言語学、美学などの幅広い選択肢から専門分野を選び、より深い研究を行うことが可能となる。また、日本語・ポーランド語間の翻訳・通訳能力の養成のため、会話などの日本語科目も必修となっている。修士論文は日本語の原書を基礎資料とすることが決まっている。

また、ワルシャワ大学日本学科は、東京大学、筑波大学、立教大学、神戸大学、学習院女子大学、信州大学など数多くの日本の大学と学術協定を結んでいる。

ワルシャワ大学における日本学研究者

メラノヴィッチ・ミコワイ教授 (Mikołaj Melanowicz) (現在名誉教授) は日本の文学を研究し、安部公房や谷崎潤一郎の作品をはじめ数多く素晴らしいポーランド語訳を出版した。多くのポーランド人読者を日本文学の世界に導く『日本文学』（第一巻と第二巻『日本の散文』、第三巻『日本の詩と演劇』）*Literatura Japonii*, PWN Warszawa, 1994-1996）、「日本文学形態論」(*Teoria japońskich form literackich*, WUJ, 2003)、『日本文学におけるナレーション。日本の現代作家の研究』(*Japońskie narracje. Studia o pisarzach współczesnej Japonii*, WUJ 2004)などを執筆した。教授資格取得論文は『谷崎潤一郎の作品における日本伝統の影響』(*Tanizaki Junichirō a krąg tradycji rodzimej*, Wydawnictwa Uniwersytetu Warszawskiego, Warszawa 1975)である。また日本語で「谷崎潤一郎とヘンリック・シエンキエヴィッチの小説におけるエトス」(『知と教養の文明学』、中央公論社、東京1991)、「漂泊者の萩原朔太郎」(国際文学研究集会、国文学資料館、東京1992)、「大江健三郎とマンネン?元年のフットボールの翻訳」(『群像』4号11995)、「安部公房一痛んだ文明のアレゴリーとアンチユートピア」(『国文学』学燈社1997)、「文学の役割と未来、その失策と救済のイメージ—安部公房と大江健三郎の文学」(宮城学院女子大学人文社会科学部紀要 2000)、「文学の役割と可能性、その波状と救済のイメージ—阿部公房と大江健三郎を中心に」(*Annals of The Institute for Research in Humanities and Social Science vol.9*, 2000)などを出版した。

ワルシャワ大学日本学科において日本語教育の発展を促進させた岡崎恒夫講師は日本語教授法を研究し、『漢字ノート』共著, WUW, 1981) や『漢字学習 第3級』(WUW, 1981) を執筆した。1992年に『ポーランドにおける日本語教と日本研究』(弘文堂、東京)

を発表した。

在日本ポーランド大使として日本との交流の発展の奔走したヘンリク・リプシツ (Henryk Lipszyc) 講師 (現在定年退職) は日本の演劇を専攻して『あたしのビートルズ—日本戯曲選集』 (*Moi Bitelsi*, Dialog Warszawa 1998) をはじめとして、三島由紀夫、安部公房、佐藤信等日本文学や戯曲など多くの作品を翻訳した。 (*Literatura na świecie 1-2-3*, Warszawa 2002)

パワシュ・ルトコフスカ・エヴァ教授 (Ewa Pałasz Rutkowska) は近・現代日本史を専攻にして、その博士論文は日本陸軍の真崎甚三郎と皇道派について書かれた。 (*General Masaki Jinzaburō and the Imperial Way Faction*, „Orientalia Varsoviensia” vol.4, Warszawa 1990)。また日本・ポーランド関係史を研究して『ポーランド・日本国交史 1904-1945』 (共著、*Historia stosunków polsko-japońskich*, Bellona Warszawa 1996) (その日本語訳は『日本・ポーランド関係史』、彩流社、2009)、『日本の対ポーランド政策 1918-1948』 (教授資格取得論文: *Polityka Japonii wobec Polski 1918-1920*, Nozomi Warszawa, 1998)、19世紀—20世紀初頭および戦間期のポーランドにおける日本のイメージ」 (シリーズ ”Discussion Paper” 東京大学社会科学研究所 2001年)、「第二次世界大戦と秘密諜報活動。ポーランドと日本協力関係」 (共著『ポロニカ』5号、東京 1995年) などを発表した。また、『近・現代日本史』 (Katarzyna Starecka と共著、*Japonia*, Trio, Warszawa 2004)、『日本におけるポーランド人墓碑の探索』 (編集者) (*W poszukiwaniu polskich grobów w Japonii* 2010)、『明治天皇近代化する日本における君主像』 (*Cesarz Meiji (1852-1912). Wizerunek władcy w modernizowanej Japonii*), WUW, 2012) などを執筆した。氏の最近の日本語での論文は、「日本に眠るポーランド人たち」『軍事史学』47、3/2011、「明治天皇、近代化する日本における君主像」『神園』10/2013、ポーランド日本間の国交回復問題。第二次世界大戦後の外交関係『日本歴史』7月号/2015 などです。

フシチャ・ロムアルド教授 (Romuald Huszcza) (ワルシャワ大学ポーランド語学学部・一般言語学及び東アジア言語学学科) の日本語への関心分野は形態論、統合論、意味論や慣用句論 (四字熟語や反義対語を含めて) である。クラクフ市のヤギェロン大学の主任を務めている同氏は、長年にわたって日本語のテーマ・レーマ構造や敬語文法や漢語の問題

(特に言語の多体系性および共体系性の立場からみた共時的接触の問題)、幅広い東アジア言語学におよぶポーランド語との対照研究をしてきた。ポーランドでの最初の日本語文法の大学レベルの教科書出版プロジェクトをスタートさせ、自らの弟子と共に三巻の内第一巻と第二巻はすでに出版した (『日本語文法。解説&練習』、*Gramatyka japońska. Podręcznik z ćwiczeniami* 第一巻、Dialog, Warszawa 1998、再版 WUJ, Kraków 2003、第二巻、初版 WUJ, Kraków 2003)。日本語の敬語を一般言語学の検討からみた理論的モデルをポーランド語やその他の言語における類似現象の研究に適用した。このテーマに関するフシチャ氏の研究書

(『対偶法。文法論・実用論・類型論』教授資格取得論文: *Honoryfikatywność – Gramatyka. Pragmatyka. Typologia*, Dialog 1996) はポーランドの言語学会に高く評価された。フシチア氏は日本語学以外に中国語、韓国語、ベトナム語に関する論文を出版したが、特にポーランド語や一般言語学の研究においては日本語のデータを主な理論基礎にする傾向が著しい。現在フシチア氏は日本語文法のプロジェクトを続けながら、日本語、中国語、韓国語およびベトナム語を漢字文化圏の共体系性および多体系性の研究を完成した。(『自然言語における多体系性および共体系性。東アジア言語圏』、*Wielosystemowość i współsystemowość w językach naturalnych. Wschodnioazjatycki krąg językowy*)。

クビアク・ホチ・ベアタ准教授 (Beata Kubiak Ho-chi) は三島由紀夫をはじめ現代文学と日本の美学を研究して、「三島の謎—川端康成に宛てた三島の書簡」(*Zagadka Mishimy – listy do Kawabaty Yasunari*, Japonica Warszawa 1998) や「ラディゲの役割—三島由紀夫が古典主義的美学を身につけていく過程」(『世界の中の三島由紀夫。三島由紀夫論集』、勉誠出版 東京 2001) などを発表した。博士論文のテーマは『三島由紀夫の小説や戯曲 (1941-1960) における古典主義的美学』(*Mishima Yukio. Estetyka klasyczna w prozie i dramacie 1941-1960*, Universitas, Kraków 2004) であった。また、『日本の美学と美術』(*Estetyka i sztuka japońska. Wybrane zagadnienia*, Universitas, Kraków 2009)、『文楽における悲劇性の表現』(*Tragizm w japońskim teatrze lalkowym bunraku*, Warszawa 2011) という本を執筆した。最近の論文の中では、“*The tragic in Japanese and Polish 18th-century drama: “The Battles of Coxinga” by Chikamatsu and “The Tragedy of Epaminondas” by Konarski*” (in: *Aesthetics and Cultures* 2012) や「笙野頼子作のタイムスリップコンビナートにおける現代東京の感情的な地形」(*Afektywna topografia współczesnego Tokio w powieści Yoriko Shōno „Kombinat zakrzywionej czasoprzestrzeni” (Taimu surippu konbināto)*, „Teksty Drugie” 6/2015) などが挙げられる。

コルジンスカ・ナブロッカ・イヴォナ准教授 (Iwona Kordzińska-Nawrocka) は、日本文化、古文、平安時代文学を専攻にして、「源氏物語における六条御息所人物像をめぐって」(Dialog, Warszawa, 1999) や「平安時代の貴族社会の愛と結婚」(*Miłość i małżeństwo w arystokratycznym społeczeństwie okresu Heian*, Japonica Toruniensia, Toruń 2001)、*「日本文学の中の恋文」(Listy miłosne w literaturze japońskiej, „Przegląd Orientalistyczny”, Warszawa, 2001)* という論文を発表した。出版された博士論文のテーマは『日本の王朝恋愛』(*Japońska miłość dworska*, Trio, Warszawa 2005) である。また、『日本食文化』(*Japońska kultura kulinarna*, TRIO, Warszawa 2008)、『浮世、井原西鶴の作品における町人文化』(*Ulotny świat ukiyo, obraz kultury mieszczańskiej w twórczości Ihary Saikaku*, WUW, Warszawa 2010) と『日本語の古典文法』(*Klasyczny język japoński*, WUW Warszawa 2013) という本を執筆した。日本の文学の翻訳者でもあります。(井原西鶴『好色一代女』2011、円地文子『女坂』2011 など。)

ジュワフスカ梅田・アグニエシカ Ph.D. (Agnieszka Żuławska-Umeda) は松尾芭蕉とそ

の弟子の詩について博士論文 (*Sztuka poetycka w szkole Matsuo Bashō 1684-1694*, Warszawa 2004) を発表した。また「俳句—17世紀・18世紀」 (*Zbiór siedemnastowiecznych i osiemnastowiecznych haiku*, Ossolineum Wrocław 1983) や「笈の小文、更科紀行翻訳解説」 (*Z podróży sakuy, Sen*, Warszawa 1994) や「宮本武蔵の五輪の書」 (*Minamoto Musashi i Pięć Kręgów*, Diamond Books, Bydgoszcz 2001) などポーランド語に翻訳した。また、“Issues Relating to Notes from The Hut of Delusion - Bashō's returns from his wanderings” („*Analecta Nipponica*” 3/2012) と *Między polskim haiku a jego japońskim przekładem – w poszukiwaniu wspólnej przestrzeni kulturowej* 『歌枕からポーランドの俳句へ—原文と翻訳の文学的空間の共有をもとめて』2014 という論文を執筆した。 *Wiśnie i wierzy. Antologia polskiej szkoły klasycznego haiku*, 2015 『桜と柳。ポーランド俳句集、19名。』という著者を編集して、解説も書いた。

スタレツカ・カタジナ Ph.D. (Katarzyna Starecka) は日本の「国内冷戦」という政治的事情の起源と構造について博士論文 (*Japonia pomiędzy Wschodem a Zachodem - geneza wewnętrznej zimnej wojny 1945-1960*) を提出した。また、「極東軍事裁判の法的基盤と組織」 (*Podstawy prawne i organizacja Międzynarodowego Trybunału Wojskowego dla Dalekiego Wschodu*, „*Japonica*” 1994)、「国際極東裁判の事後法論争」 (*Kontrowersje dotyczące prawa ex post facto w świetle Międzynarodowego Trybunału Wojskowego dla Dalekiego Wschodu*, „*Japonica*” 1995)、「日本政党制の分類試み」 (*Próba typologii systemu partyjnego lat 1955-1993*, „*Japonica*” 1995)、『近・現代日本史』 (Ewa Pałasz-Rutkowska と共著, *Japonia*, Trio, Warszawa 2004) を執筆した。2015年には次のようなポーランド語の論文を出版した。「平成の日本。日本の伝統からの離反と回帰」 (*Wychowanie moralne we współczesnej japońskiej szkole*)、「日本における東京裁判の判決の受け止め方」 (*Japonia wobec werdyktu Trybunału Tokijskiego*)、「日本国民の誇りの復活の問題点」 (*Trudny proces wskrzeszenia japońskiej dumy narodowej*)、「歴史的なレガシーと日本の再アジア化の展望」 (*Historyczne zaszczości i perspektywy 'reazjanizacji' Japonii*)。英語の論文なかでは「教育基本法の改正論議にみられる現代日本における愛国心教育の問題」 (*The problem of Patriotic Education in Modern Japan in light of the revision of the Fundamental Law of Education, in: Is the 21st Century the Age of Asia. Deliberations on Culture and Education*, 2012) などが挙げられる。

ザレフスカ・アンナ Ph.D. (Zalewska Anna) の専攻は古典文学と伝統文化（特に書道と茶道）です。彼女は「小倉百人一首」や裏千家の大宗匠、千宗室の「茶の精神」をポーランド語に翻訳しました。年には『日本の書。書の道に関する三つの論』 (*Kaligrafia japońska. Trzy traktaty o drodze pisma*, 2015) という本を執筆した。最近の論文の中では、「鬼になった女について—日本の文学における橋姫」 (*O kobiecie, która zamieniła się w diabła – interpretacje motywu hashihime w literaturze japońskiej*, 2013) や「狂言役者、茂山家—ある

いは「お豆腐狂言」について」(*Aktorski ród Shigeyama, czyli o tym, że kyōgen jest jak tofu*, 2014) や「短歌は必ず花とか恋とか歌うべきか—現代歌人、俵万智の歌を巡って」(*Czy wiersze tanka muszą mówić o kwiatach i miłości? O twórczości współczesnej poetki, Tawary Machi, w: Alchemia słowa i obrazu. Tradycje, dekonstrukcje i rekonstrukcje*, 2015) などが挙げられる。

マッフ・ブライソン・ウルシュラ M.A. 講師 (Mach-Bryson Urszula) は日本の思想・茶道史裏千家学園において茶道を学んだ。初めてのポーランド人として坐忘斎お家元より茶名「宗宇」を授かりました。久松真一について博士論文を書いている最中である。

藤井陽子・カルポルック M.A. 講師 (Fujii Yōko-Karpoluk) は早稲田大学で修士号を取得した後、日本学科で日本語を教えるようになった。博士論文執筆中でもあり、「能における戦争と鎮魂」を中心に研究を進めている。

本文著者のコズィラ・アグニェシカ (Agnieszka Kozyra) は日本の哲学・宗教史を専攻して内村鑑三の日本的キリスト教について博士論文 (*Samurajskie chrześcijaństwo*, Dialog, Warszawa 1994; (その本の日本語訳『日本と西洋における内村鑑三』、教文社、東京 2001) を出版した。また、「東洋的無—西田幾多郎と臨濟」(*Eastern Nothingness in Nishida Kitarō and Linji, Logique du lieu et dépassement de la modernité Oasia, Bruxelles 1999*) や “The Affirmation of Ordinary Mind (Byōjōshin) in the Landscapes of Sesshū Tōyō (1430-1506)” (in: *Aesthetics and cultures*, 2012) “Zen Influence on Japanese Dry Landscape Gardens”, (in: *Art of Japan, Japanisms and Polish-Japanese Art Relations*, 2012) という論文などを発表した。2004年に西田幾多郎哲学から見た禅の思想的伝統について『禅の哲学』(教授資格取得論文: (*Filozofia zen*, PWN, Warszawa 2004) を出筆した。親鸞の『歎異抄』、西田幾多郎の「経験科学」、
「場所的論理と宗教的世界観」や「絶対矛盾的自己同一」、有吉佐和子の『恍惚の人』などをポーランド語に翻訳した。『西田幾多郎の無の哲学』(Wydawnictwo Nozomi, Warszawa 2007) という本に基づいて日本語で「パラドクスのニヒリズム—西田とハイデッガー」(国際日本文化研究センター『日本研究』33/ 2006) と英語で Nishida Kitarō's Logic of Absolutely Contradictory Self-Identity and the Problem of Orthodoxy in Zen Tradition” (“Japan Review” No. 20, International Research Center for Japanese Studies, Kyoto 2008) という論文を発表した。また、『禅の美学』(*Estetyka zen*, Wydawnictwo TRIO, Warszawa 2010) と『日本の神話』(Wydawnictwo Szkolne PWN ParkEdukacja, Warszawa 2011) という本も出版した。

ワルシャワ大学日本学科図書室

日本学科の図書室は、国際交流基金、トヨタ基金、甲府ロータリークラブ、日本・ポーランド協会、三菱商事株式会社、講談社、小学館、ワルシャワ日本商工会および多くの個人寄贈者の方々の支援により、その蔵書を充実させてきた。中曽根康弘元首相、海部俊樹元首

相、立入広太郎教授、また、かつて日本語講師としてワルシャワ大学で教鞭を執った諸氏なども蔵書拡大に大いに貢献した。1983年には、日本政府よりAV機器やLL教室が寄贈された。これらの援助がなければ、同学科の日本学教育の水準は現在ほど高くなっていたとは思われる。長年にわたり、日本学科の入学者募集は隔年であったが、現在は毎年入試が行われており、学生数は全学年で200名前後にまで増えた。

ワルシャワ大学における日本語教育75周年を記念して、日本学科は日本出版クラブから書籍の寄贈を受けたが、これは岡田吉弘会長の助力によるところが大きい。

また、2004年に行われたヨーロッパ日本学協会（European Association for Japanese Studies, EAJS）の学術会議を機に、日本学科は日本文化国際交流会からも書籍の寄贈を受けるようになった。

三井物産冠講座の趣旨

2010年7月、三井物産株式会社榎田会長のポーランド訪問の際、楠本在ポーランド日本国大使（当時）との会食の席において、優秀人材育成及び日本理解を深める社会貢献活動として、同大使より冠講座に対し多大なる関心が寄せられた。その後、在ポーランド日本国大使館及び三井物産ワルシャワ支店にて検討を重ねると共に、ワルシャワ大学日本学科長のパワシュ・ルトコフスカ・エヴァ教授（当時）の同意を得て、日本の伝統文化・精神性に対する関心が極めて高い親日国であるポーランドで冠講座が開講される運びとなった。ヨーロッパでオランダに次ぎ、長い日本文化研究の歴史を誇るワルシャワ大学日本学科の学生を対象に、講座の開講が決定された。

ワルシャワ大学は長い歴史と伝統を持つ、ポーランド国内随一の名門大学として知られており、長きにわたる日本文化研究の歴史を有する。同冠講座は、ポーランドの若手人材育成と日本への関心を高める講座内容を目指しており、これまでに以下の講座が開催されてきた。

2011年 第一回 「歴史と冒険のシンクロニシティー 『天の原』歌をめぐる」、辻原登氏（芥川賞作家）

2011年 第二回 「3月11日以後の日本文学」、平野啓一郎氏（芥川賞作家）

2012年 第一回 「『はやぶさ』が挑んだ世界初の往復宇宙旅行とその7年間の歩み」、川口淳一郎氏（JAXAプロジェクトマネージャー）

2012年 第二回 「変わる日本の女性の役割」、坂東眞理子氏（昭和女子大学長）

2013年 第一回 「波打ち際の文学」、松浦寿輝氏、（詩人、芥川賞作家）

2013年 第二回 「小説を書き続けることについて」、綿矢りさ氏（芥川賞作家）

2014年 第一回 「禅と日本庭園」、枡野俊明氏（禅僧、庭園デザイナー）

2014年 第二回 立川志の春氏（落語家）

2015年 近藤麻理恵氏（片づけコンサルタント）

2011年度は主に日本学科の学生が対象とされたが、2012年度からは日本学科の学生のみ

ならず、学内横断的に、より幅広い層が聴講できるよう同時通訳付となった。これは、ポーランドの現場で日本社会・文化を発信することにより、日本への理解深化を図り、両国友好の更なる発展と交流拡大に寄与できる人材を育成することを目指す、冠講座の趣旨と合致するものである。

2012年度の第二回で当初予定されていた二年間の講座は終了したが、過去四回の講演は安定して多数の参加者を集め、熱心な聴講に続いて意欲的に質疑応答が展開される等、毎回大盛況であったこと、また、ワルシャワ大学と三井物産も講座を通じた相互理解によって良好な関係を構築できたことをふまえ、引き続きポーランドにおける日本の存在感及び可視性の向上、親日層の拡大、知日派の育成を目的に、新たな三年間への取組みが決定された。日本に対する理解を深め、日本とポーランド両国の将来にわたる友好親善に資する人材を育成するという目標の更なる達成が、今後も期待されている。

高島記念基金

高島記念基金は、日本政財界の要人であった高島浩一氏（1922-2000）によって1992年9月2日に創設された。高島氏は、父君の秀次氏と共に1947年に設立した、共英製鋼株式会社の会長を務め、戦争で破壊された祖国の冶金産業の改善に大いに貢献した。高島氏は、本業以外にも慈善福祉活動に積極的に参加し、国内外の学術組織を支援した。ポーランドの真の友として、1996年から2000年まで戦後初の在阪ポーランド共和国名誉総領事を務め、両国間の政治・経済・科学・文化交流を積極的に奨励した。

高島記念基金は、1993年に基金登録され、ワルシャワ大学東洋学部日本学科付設の基金として活動を開始した。その事業目的は、ワルシャワ大学における日本の歴史、文化、文学と言語の研究、そして経済学、社会学、政治学などのテーマを含む現代日本関連課題の研究、更に日本語教育活動の支援である。その他、高島記念基金はポーランドにおける日本文化の普及、そして両国間の学術協力と文化交流の活性化にも貢献している。高島記念基金は、非営利活動を旨とし、1994～2003年に出版されていた「Japonica ヤポニカ」という学術専門誌の定期刊行を含む、日本文化に関連する研究論文の出版支援、奨学金の提供、日本語教育への支援、さらにワルシャワ大学日本学科の学生の研究・言語合宿への資金補助、および図書・教材の補充などを通じ、事業目的を遂行している。高島記念基金は、ワルシャワ大学日本学科以外での日本文化の普及を目的とする活動も援助している。

1995年2月22日、高島浩一氏は、ポーランドにおける日本研究発展支援への貢献に対し、ポーランド共和国大統領より「ポーランド共和国黄金功労勲章」を授与された。高島氏は生前、常にワルシャワ大学日本学科に心を寄せ、個人的にも、日本学科の学生・教員が利用できるよう、日本研究に不可欠な多くの書籍を寄付してきた。日本とポーランドの友情のしるしとして高島氏より1998年に寄贈された桜の苗木100本は、ワルシャワ大学国文学部の裏庭に植えられ、大きく成長し、毎年きれいな花を咲かせている。

高島氏は、他にも多くの企画を考えていたが、突然の他界により阻まれてしまった。しかし、ポーランドにおける日本文化の普及と、日本・ポーランド間の関係を深めるという遺志は、氏の令妹高島和子氏（2002～2012年・在大阪ポーランド共和国名誉総領事）と令弟高島成光氏、そして令息高島秀一郎氏に引き継がれた。そして、その遺志は、日本の数寄屋造りの専門家が伝統的な数寄屋大工技術を駆使してワルシャワ大学図書館内に建てた「懷庵」という茶室（2004年にワルシャワ大学日本学科に寄付）として見事に具現された。茶室建築は高島浩一氏の発案ではあったが、その実現には、ワルシャワ大学日本学科を支援し続ける高島家の方々や共英製鋼株式会社の方々が多数関わり、その助力により達成された。高島記念基金は、その創設者の遺志を継ぎ、事業目的を遂行し続けているのである。

「懷庵」茶室

2004年10月19日、前ポーランド共和国名誉総領事ならびに共英製鋼前会長である故高島浩一氏を記念した茶室「懷庵」の茶室披きが行われた。この茶室は1992年にワルシャワ大学日本学科の更なる発展のため高島浩一氏が設立した「高島基金」が、共英製鋼株式会社、共英産業株式会社の協力を得て、二年半にわたり準備、建築し、ワルシャワ大学日本学科に寄贈したもので、同学科の誇りとなっている。

「懷庵」は小間、四畳半、水屋、腰掛待合、露地一式から成っており、ワルシャワ大学新図書館の2階に建設された。設計は飯島照仁氏、施工は京都数寄屋建築「工匠 すずき」が担当し、茶室のお道具類は、現在も日本学科の茶道指導に貢献し続けている杉本みちる教授の寄付によるものである。茶室名は高島浩一氏が崇敬した京都の圓通寺の北園文英老師が「懷庵」と名付け、扁額の字を書いた。「懷庵」はポーランド初の本格的茶室であり、日本・ポーランド間の文化的、人的交流の場として、大いに活かされている。2007年6月に初めてポーランドを訪問した茶道裏千家千玄室鵬雲斎大宗匠をはじめ、茶道の流派を問わず多くの方々茶室を訪ね、なお一層の両国文化の相互理解に寄与している。また、千玄室大宗匠の訪問の際には日本学科の授業の一環として茶道コースが新設された。「懷庵」はポーランドにいながらにして日本伝統文化に親しみ、実際に触れながら学びを深められる場所として、恵まれた機会と場所を提供している。

2016年にワルシャワ大学における日本語教育95年周年、独立した日本学科設立の60年周年を迎えるようになります。日本学科の代表としてその発展に貢献してくださいました方々に心より感謝致します。